

介護現場で役立つ住空間表現の基礎技術（第1報）

岸 本 幸 臣・宮 崎 陽 子

本研究は、生活支援の福祉現場で日常的に要介護者と密接に関わる専門職が、対象者の居住環境の問題点を捉え、それを建築専門職に客観的に伝達するために必要な図面表現技法のミニマムレベルを策定する意義と、実現に向けての方法論の考察と提言を行うことを目的とした。今回は建築や住居に門外漢の看護系学生180名に90分の住宅平面図転写の演習を課した後実施した、自宅平面図の作図課題30名分を分析対象とし、10項目の評価基準で評価した。その結果、約6割強の学生が空間特性伝達に必要な図面表記が可能であることが把握できた。これをもとに介護現場で簡易に平面図を採取できる「住まいの簡易点検ノート」を試作したが、今後はこの有効性の検証と実用化に向けての学習方法の検討が課題である。

1970年代の認知症ケアについての再評価

—家庭奉仕員による認知症老人への生活支援の実践を通じて—

渋谷 光 美

認知症ケアの歴史の変遷において、1970年代は、「ケアなきケアの時代」、「失敗の時代」であったとされてきた。しかし、東京都では認知症老人の実態調査が行なわれ、家庭奉仕員（ホームヘルパー）が認知症老人の生活支援を実践していた。本稿では、1970年代の国会審議や新聞資料、家庭奉仕員事業の関連資料をもとに、1970年代の認知症ケアの動向と家庭奉仕員による認知症ケアの一端を把握した。家庭奉仕員の実践は、抑圧的なケアではなく、認知症老人を過去の生活暦も含めて理解した上でのケアと、在宅生活継続のための生活支援であった。1970年代の認知症ケアは、再評価すべきであることが明らかになった。

心拍数と疲労自覚症状からみた入浴介護動作における介護者の生体負担

西 口 初 江

日常生活において、入浴は心身の緊張を緩和しリラックスさせ、身体の清潔を図るという目的であるが、介護者が車椅子等を用いて要介護者を入浴させる作業は介護者の生体負担が大きいと考えられる。本研究では、心拍数と疲労自覚症状から入浴介護動作時における介護者の生体負担の程度について検討し、実験結果から生体負担を軽減するための一考察を行った。入浴介護動作において、一人介助（半介助）は二人介助（全介助）より作業時間は長い、心拍数かみた循環器系の生体負担に差異は認められなかった。しかし、疲労部位の自覚症状では二人介助（全介助）が高い傾向にあり、熟練者は非熟練者と比較して減少傾向が認められたことから、熟練者により身体各部位の負担は異なることが示唆された。

施設入居高齢者の身体計測値の経時的変化と非侵襲的栄養評価指標の検討

青 木 るみ子・後 藤 由美子
中 村 亜 紀・坂 井 孝

本調査では、調査施設において従来より実施されている体重計測値と非侵襲的身体計測値との関連性を年代別に解析した。さらに各身体計測値の経時的変化を確認することにより、栄養評価の指標としてAMC値を経時的にモニターすることの有益性をより詳細に検討することを目的とした。

体重計測値の変化率(%)とIn Body S20より得られた身体計測値の変化率(%)の経時的変化を検討したところ、%体脂肪量についてはG IIの80歳代に計測開始時と比較して16週間後の数値において増加傾向が、また、G Iの80歳代に減少傾向が認められた。G Iについては%体重、%BMIおよび%体脂肪量に各年代における経時的変化は認められなかった。一方、%AMCについてはG Iの全ての年代に有意差をもった経時的減少を認めた ($p < 0.05$)。これらの結果から、身体計測値の変化は80歳代から顕在化する可能性が示され、AMCを経時的に評価することで筋肉量の減少を早期に捕らえることができ得る可能性が示唆された。

羽衣国際大学人間生活学部食物栄養学科におけるe-learning システムの構築

和田野 晃・南野 勝彦・双和 光雄
西村 公子・宇佐見 美佳・池 晶子
安岡 佑美・金井 猛徳

本学・人間生活学部でe-learningシステムMoodleを立ち上げ、食物栄養学科での試用について紹介した。コースの作成、学生のアカウントの一括導入、教材ファイルのアップロード法、問題の作成とアップロード法を記した。導入後の学生利用状況と今後の利用率アップを図る工夫についても検討した。